

13 単回帰（最小二乗法）+回帰のまとめ

1. 回帰直線は「どう決める？」（最小二乗法）

今日の結論（先に言う）

回帰直線は、ズレ（残差）の二乗の合計がいちばん小さくなるように決められています。

- ・前回：散布図から回帰直線を引き、式と R^2 を見て予測した
- ・今日は：その「直線の決め方」を理解する（アルゴリズム）
- ・ゴール：Excel の結果をブラックボックスにせず、なぜその線かを説明できる

到達目標

- ・残差 ($y - \hat{y}$) を「点と線のズレ」として説明できる
- ・残差平方和 (SSE) を作り、小さいほど良いと説明できる
- ・「最小二乗法 = SSE 最小の線」と言葉で言える

A-1：第12回の立ち位置（運用）

【目的】「今日は何を理解する回か」を最初に固定する（最小二乗法＝線の決め方）。

【口頭補足】第11回は「使う（予測する）」回。第12回は「作り方（決め方）」の回。

【実習仕様】clean データで、 $\hat{y} \rightarrow$ 残差 \rightarrow 残差の二乗 \rightarrow SSE（合計）を Excel で作る（提出なし）。

【運用】冒頭で確認：回帰は“判断”ではなく“予測”。（検定と混同させない）

2. ストーリー：次の目標は「ポテト売上 UP」

店長は、ポテトのばらつきを改善したあと、次の目標を立てました。

店長の目標：

- ・ ポテトは利益率が高い
- ・ だから「**ポテトの売上を伸ばす**」ことを目標にする

そのために知りたいこと：

- ・ ハンバーガーの注文が増えると、ポテトの注文も増えるのか？
- ・ 関係があるなら、**来週の注文数を予測**できるか？

📌 今日の視点：関係を式（直線）にして予測に使う。

その直線をどうやって決めるかが今日のテーマ。

A-2：例を継続する理由（口頭補足）

【目的】例（ハンバーガーショップ）を固定し、内容理解に集中させる。

【口頭補足】例が変わると「状況理解」からやり直しになる。店長ストーリーで一貫させる。

【実習仕様】 x =バーガー数、 y =ポテト数（clean / outlier の 2 データで扱う）。

【運用】ここで「今日は予測の話」と言い切る（検定の“判断”と混同しやすい）。

3. 前回回収：検定は「判断」／回帰は「予測」（混同しない）

前回（検定）と今回（回帰）は目的が違います。

前回：仮説検定（判断）

- ・ 「平均が基準と違うと言ってよいか？」を珍しさ（ p 値）で判断する
- ・ 結論は「棄却／棄却できない」で書く

今回：回帰（予測）

- ・ 「 x が増えると y はどう変わるか？」を式（回帰直線）で表す
- ・ 式を使って未来の y を予測する

✖️ 今日は p 値は使わない。代わりに「ズレが小さい線」を考える。

A-3：混同防止（短く強く）

【目的】検定と回帰の混同を最初に止める（留学生ほど混ざりやすい）。

【口頭補足】検定＝結論を“判断”。回帰＝値を“予測”。今日は p 値は使わない。

【実習仕様】回帰では「ズレ（残差）」を作り、その二乗の合計（SSE）で線の良さを比べる。

【運用】確認質問：検定は何？ → 判断。回帰は何？ → 予測。今日のキーワードは？ → 残差・二乗・最小。

4. 問い：同じ散布図に「線」は何本でも引ける

散布図を見ると「だいたい右上がり」に見えてきます。
でも、直線は1本に決まっていません。

問い合わせ

この散布図に引く直線として、
どの線が「良い線」でしょうか？

- ・ 傾きが少し違う線／上下にずれた線……どれも「それっぽく」見える
- ・ だから、見た目ではなく評価基準（ルール）が必要

B-4：問い合わせ（運用）

【目的】「回帰直線は 1 本に決まる」という前提を崩し、評価基準が必要だと気づかせる。

【口頭補足】学生に質問：「線 A・B・C どれが良い？」→理由も言わせる（“近い” “それが小さい” を引き出す）。

【実習仕様】後半で、Excel で「ズレ」を数値化して比べる (SSE まで作る)。

【運用】ここではまだ数式を出さない。まず“線の良さを決めたい”という欲求を作る。

5. 評価の方針：良い線=点に近い（ズレが小さい）を数で決める

良い線を決めるために、次の方針を使います。

✖️ 良い線とは、点と線のズレが全体として小さい線。

ズレを「数」で決めるために、次を行います。

- ・ 各点について「ズレ」を測る
- ・ 全部の点のズレをまとめて1つの数にする
- ・ その数がいちばん小さい線を選ぶ

次に出てくる言葉：

- ・ 点と線のズレを **残差**（ざんさ）と呼ぶ
- ・ 次スライドで、残差を図と言葉と式で定義する

B-5：評価基準を先に固定（口頭補足）

【目的】回帰の本体は「線を決めるルール」だと理解させる。

【口頭補足】良い線=“当たる保証”ではなく、“ズレが小さい線”。(未来の保証ではない)

【実習仕様】残差→残差の二乗→合計（SSE）を Excel で作り、線の良さを比較する。

【運用】次スライドにつなぐ一言：「ズレ=残差。まず“残差って何？”を定義する」。

6. 残差の定義：残差 = 実測 y - 予測 \hat{y} (縦のズレ)

回帰直線（予測の線）を引くと、各点には「ズレ」が生まれます。
このズレを残差（ざんさ）と呼びます。

$$\text{残差 } e = y - \hat{y}$$

- ・ y : 実測値 (実際に観測された値)
- ・ \hat{y} : 予測値 (直線が予測する値)
- ・ 残差 e は、点と線の「縦方向の距離」 (上下のズレ)

💡 回帰直線は「全部を完全に当てる線」ではない。
だから、残差（ズレ）は必ず出る。

C-6：残差を「距離」として固定（運用）

【目的】残差を「式の引き算」ではなく「点と線の縦のズレ」として理解させる。

【口頭補足】横方向ではなく縦方向のズレを見る（ x は説明変数として固定して考える）。

【実習仕様】Excel で各行に \hat{y} （予測）列を作り、残差列 $e = y - \hat{y}$ を作る。

【運用】一言確認：「残差って何？」→「実測 - 予測（縦のズレ）」。

7. 残差の符号：線より上は+／下は-（そのまま足すと相殺する）

残差には符号（プラス／マイナス）があります。

- ・ 点が直線より上にある： $y > \hat{y}$ ので、**残差は+**
- ・ 点が直線より下にある： $y < \hat{y}$ ので、**残差は-**

ここで大事な問題が起きます。

 残差をそのまま足すと、
+と-が打ち消し合って（相殺して）小さく見えてしまう。

例（イメージ）

- ・ +5 と -5 を足すと 0（ズレがないように見える）
- ・ でも実際には、上下に大きくズれている

C-7：なぜ“そのまま足せない”のか（運用）

【目的】「相殺」という問題を先に理解させ、次の“二乗”が必要な理由を作る。

【口頭補足】ズレは“方向”ではなく“大きさ”を評価したい（だから符号は邪魔になる）。

【実習仕様】Excelで残差列を作った後、残差の二乗を作る（相殺を防ぐ準備）。

【運用】次につなぐ問い合わせ：「相殺を防ぐにはどうする？」→「二乗する」。

8. 問題：残差の合計は「+と-」で打ち消し合い、基準にならない

前スライドで見た通り、残差 $e = y - \hat{y}$ には+と-があります。

そのため、残差をそのまま足すと「ズレの大きさ」を表せません。

なぜダメか（相殺）

- ・ 例：+5 と -5 を足すと 0
- ・ 合計が 0 でも、実際には上下に大きくズれている

だから、回帰では「符号つきの合計」ではなく、
ズレの大きさを足し合わせる方法が必要。

D-8：二乗への導入（運用）

【目的】「合計では評価できない」という問題意識を確定し、二乗の必然性を作る。

【口頭補足】ズレは“方向”ではなく“大きさ”を評価したい、という言い方に統一する。

【実習仕様】この直後に「残差の二乗」を作らせ、相殺が消えることを体感させる。

【運用】ここで問いかけ：「相殺しない方法は？」→ 次スライドで二乗を提示。

9. 二乗する理由：なぜ $(y - \hat{y})^2$ なのか

相殺を防ぐために、残差を二乗してから足し合われます。

二乗する 3 つの理由（ここだけ覚える）

1. マイナスが消える（相殺しない）
2. 大きいズレを強く罰する（大外れを重く扱う）
3. 計算として扱いやすい（後で「最小」を作りやすい）

📌 回帰は「全部当てる」ではなく、
ズレができるだけ小さくすることが目的。

D-9：二乗の納得（口頭補足）

【目的】二乗を“暗記”ではなく“必要性”として納得させる。

【口頭補足】③は深掘りしない。「二乗だと数学的に最小を作りやすい」程度で止める。

【実習仕様】残差列と残差の二乗列を並べ、相殺が消えることを確認させる。

【運用】学生に一言で言わせる：「なぜ二乗？」→「相殺しない／大ズレを重くする」。

10. 残差平方和 (SSE) : ズレの大きさの合計を1つの数にする

残差を二乗して、全部足した数を作ります。

これが「線の良さ」を表す指標になります。

$$\text{SSE} = \sum (y - \hat{y})^2$$

- 各点のズレ : $(y - \hat{y})$
- そのズレの大きさ : $(y - \hat{y})^2$
- それを全部足す : $\sum (y - \hat{y})^2$

📌 SSE が小さいほど、点に近い（ズレが小さい）線。

D-10：SSE を「1つの数」にする意味（運用）

【目的】多数の点のズレを「比較できる 1つの数」にまとめる発想を固定する。

【口頭補足】SSE は「ズレの大きさの合計」。単位は y の二乗になるが、ここでは深掘りしない。

【実習仕様】Excel で残差の二乗を作り、SUM で SSE を作成（線ごとに SSE 比較も可能）。

【運用】次スライドにつなぐ問い合わせ：「良い線は？」 → 「SSE が最小の線」。

11. 最小二乗法：SSE が最小になる直線が「回帰直線」

同じ散布図に引ける直線は何本もあります。
その中から**1本**を選ぶルールが、最小二乗法です。

最小二乗法（言葉での定義）

- ・ 直線ごとに SSE（残差平方和）を計算する
- ・ SSE がいちばん小さい直線を選ぶ

つまり、回帰直線は
「ズレの二乗の合計が最小」になるように決まる。

注意（ここで止める）

- ・ 今日は「最小にする考え方」を理解する回
- ・ 次の塊で「実際にどうやって最小を作るか（Excel で体験）」へ進む

D-11：結論の回収（運用）

【目的】A-1で先に出した結論を、SSE の定義を経て“納得”として回収する。

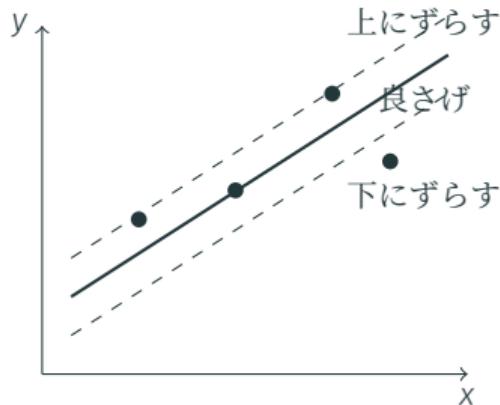
【口頭補足】ここで微分や公式導出は不要。最小二乗法=「SSE が最小」と言えれば十分。

【実習仕様】Excel で SSE を実際に計算し、線を変えると SSE が変わることを体感させる。

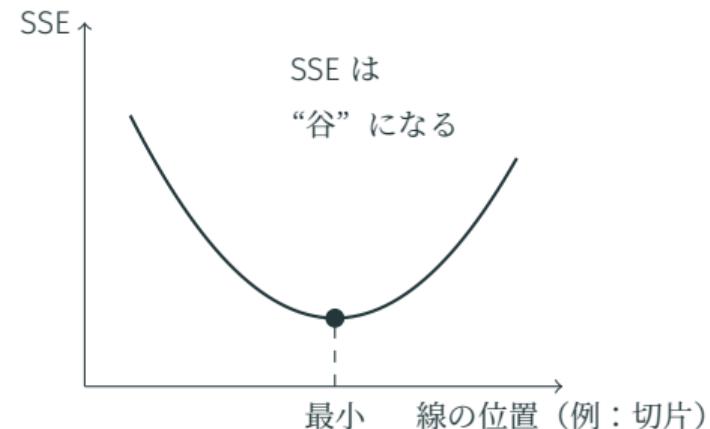
【運用】ここで一言確認：「回帰直線はどう決まる？」→「SSE が最小の線」。

12. 直感：線を少し動かすと SSE が増える／減る (“最小” のイメージ)

回帰直線は「当てずっぽう」で決めているのではなく、
SSE（ズレの二乗の合計）を最小にするというルールで決まります。



直線を上下に動かすだけでも、
点とのズレが変わる



SSE がいちばん小さい場所が 1 つ決まる

E-12：最小の直感を作る（運用）

【目的】「最小二乗法 = SSE 最小」を“谷のイメージ”で直感的に理解させる。

【口頭補足】右図は「SSE が最小になる場所がある」というイメージ図（厳密な導出ではない）。

【実習仕様】後で Excel で線（トレンドライン）を出す = SSE 最小の線が自動で選ばれる、と接続する。

【運用】ここで確認：「回帰直線はどう決まる？」 → 「SSE が最小の線」。

13. ミニ例 (3点) : 線Aと線BでSSEを比べる (計算は最小限)

3つの点があるとします (散布図の一部だと思ってOK) :

点	(x, y)	線Aの \hat{y}	線Bの \hat{y}
1	(1, 2)	2	1
2	(2, 2)	3	2
3	(3, 4)	4	3

ここで2本の候補 :

- ・ 線A: $\hat{y} = x + 1$
- ・ 線B: $\hat{y} = x$

残差 $e = y - \hat{y}$ と SSE (残差の二乗の合計) を比べます。

点	e_A	e_A^2	e_B	e_B^2
1	$2 - 2 = 0$	0	$2 - 1 = 1$	1
2	$2 - 3 = -1$	1	$2 - 2 = 0$	0
3	$4 - 4 = 0$	0	$4 - 3 = 1$	1
合計 (SSE)		1	2	

E-13：SSE 比較を“手で一回だけ”やる理由（運用）

【目的】 SSE が「点のズレの二乗の合計」で、比較に使えることを具体例で固定する。

【口頭補足】 ここでは導出はしない。「SSE で比べると、良い線が決まる」を体感させる。

【実習仕様】 Excel で同じことを大量の点で自動的にやっている（手作業はこの例だけ）。

【運用】 計算は最小限：残差→二乗→合計、の流れだけを覚えさせる。

14. Excel とつながる：トレンドラインの式 = SSE 最小の結果

Excel で散布図に「近似曲線（トレンドライン）」を追加すると、直線の式 $\hat{y} = ax + b$ が表示できます。

ここがポイント

Excel のトレンドラインは、裏側で SSE が最小になるように a (傾き) と b (切片) を自動で決めている。

つまり：

- 私たちがやってきた「SSE で良い線を決める」ルールを
- Excel が自動で実行して、式を出している

実習でやる操作（次の塊につながる）

- 散布図を作る (x =バーガー数, y =ポテト数)
- 近似曲線（線形）を追加し、「**式を表示**」「**R²を表示**」
- その式で \hat{y} を作り、残差と SSE を作る

E-14：Excel のブラックボックスを壊す（運用）

【目的】「トレンドラインの式＝勝手に出てくる数字」ではなく「SSE 最小の結果」と結びつける。

【口頭補足】Excel は“魔法”ではない。残差の二乗を全部足して最小になる線を選んでいるだけ。

【実習仕様】散布図→トレンドライン→式/R の二乗表示→ \hat{y} 列→残差列→残差の二乗列→ SSE (SUM)。

【運用】次の実習へ自然につなぐ：「じゃあ Excel で同じことをやってみよう」。

15. 実習① (clean) : SSE を自分で作って「良い線」を理解する (全体手順)

Excel のトレンドラインは「SSE が最小の直線」を自動で出しています。
実習①では、その中身を**自分の手**で再現します。

実習①のゴール（ここだけ）

予測値 \hat{y} → 残差 → 残差² → 合計 (SSE) を作り、
SSE が小さいほど良い線だと確かめる

1. 散布図から回帰式を表示し、傾き a と切片 b を取り出す
2. 各行で $\hat{y} = ax + b$ を計算して「予測値」列を作る
3. 残差 $e = y - \hat{y}$ 列を作る（縦のズレ）
4. 残差² 列を作る（マイナスを消す+大ズレを強く罰する）
5. 残差² を合計して SSE を出す (SUM)

📌 最後に a や b を少し変えて、SSE が増えることを確認する

F-15：実習①の位置づけ（運用）

【目的】「SSE 最小」が Excel の裏側のルールだと体験で納得させる。

【口頭補足】ここでは“導出”しない。SSE を作って比較するだけで十分。

【実習仕様】データは clean 版を使用（外れ値なしで成功体験を作る）。

【運用】このスライドを見せたら、すぐ Excel 操作へ移る（説明疲れ対策）。

16. 実習①-1 (clean) : \hat{y} (予測値) 列を作る (回帰式を使う)

まず、散布図にトレンドライン（線形）を追加し、
数式 $\hat{y} = ax + b$ を表示して a と b をメモします。

- x : バーガー注文数（説明変数）
- y : ポテト注文数（目的変数）
- \hat{y} : 回帰式が出す「予測値」

Excel で作る列（例）

(例) a と b をセルに置く：

a を H1、 b を H2 に入力

予測値列（例：D2）

$=\$H\$1*A2 + \$H\2

📌 ポイント： $\$$ を付けて a, b のセルを固定すると、下までコピーできる

F-16：操作の落とし穴（運用）

【目的】 \hat{y} 列（予測値）を全員が確実に作れるようにする。

【口頭補足】 \hat{y} は「点の中心を通る線が出す予測」。実測 y とは一致しない。

【実習仕様】(1) 散布図作成→(2) 線形近似→(3) 数式表示→(4) a, b をセルへ→(5) \hat{y} 列作成。

【運用】 a, b を式に直書きさせるとミスが増えるので、セル参照（\$固定）を推奨。

17. 実習①-2 (clean) : 残差・残差²を作り、SSEを計算する

残差は「実測」と「予測」のズレです。

回帰直線がどれだけ点に近いかを、残差で数にします。

作る列（定義）

残差: $e = y - \hat{y}$ (縦のズレ)

残差²: e^2 (マイナスを消して足せるようにする)

SSE: $\sum e^2$ (残差²の合計)

Excel例（列が違ってもOK）

- ・ 残差列（例：E2）: $=B2 - D2$ $(y - \hat{y})$
- ・ 残差²列（例：F2）: $=E2^2$ または $=POWER(E2, 2)$
- ・ SSE（例：F1）: $=SUM(F2:F31)$

📌 SSEが小さいほど、点に近い (=良い線)

F-17：ここで固定したい言葉（運用）

【目的】 残差→二乗→合計（SSE）の意味を“列”として定着させる。

【口頭補足】 残差の合計は相殺するのでダメ。二乗してから足す。

【実習仕様】 全員が SSE を 1 つのセルで出せたら次へ。数値が合わない学生は残差列を確認させる。

【運用】（上付き）はエラーになりやすいので、必要なら POWER を推奨。

18. 実習①-3 (clean) : a や b を少し変えて、SSE が増えることを確認する

ここが「体験で納得」パートです。

今の回帰式は、Excel が SSE が最小になるように選んだ直線でした。

やること (超シンプル)

a または b を少しだけ動かして、SSE がどう変わるかを見る

(例) a を $+0.1$ / b を $+1$ など

確認のしかた

- ・ a, b を変える $\Rightarrow \hat{y}$ 列が変わる
- ・ \hat{y} が変わる \Rightarrow 残差・残差² が変わる
- ・ その結果、SSE が増える (多くの場合)

📌 観察の結論：元の a, b が「SSE を最小にする」直線だった

F-18：実習①の締め（運用）

【目的】「最小」の意味を“数値の増減”で納得させる（説明ではなく体験）。

【口頭補足】少し動かすだけで SSE が増える=“谷の底”にいた、ということ。

【実習仕様】(1)元の SSE をメモ→(2) a を少し変える→SSE 再確認→(3) b も少し変える。

【運用】変え幅が大きいと混乱するので「少しだけ」を強調。早い学生には「どちら方向に動かすと増え方が大きい？」を追加。

19. 実習② (outlier) : 二乗は外れ値に弱い (線が引っ張られる)

実習① (clean) と同じ手順を、outlier データでもう一度やります。

ここで見たいのは、二乗 (e^2) が外れ値に強く反応するという性質です。

今日の観察ポイント (ここだけ)

外れ値があると、1点の大きなズレが e^2 で何倍にも大きくなり、

SSE を強く支配する → 回帰直線が外れ値に引っ張られる

やること (実習①と同型)

1. outlier 版で散布図 → トレンドライン → 式 (a, b) を表示
2. \hat{y} 列 → 残差 e 列 → 残差² 列 → SSE を作る
3. clean 版と比べて、どこが大きく変わったかを見る

見るポイント (比較)

- ・ a (傾き) や b (切片) はどれくらい変わった?
- ・ R^2 は上がった? 下がった?
- ・ 残差² 列で、異常に大きい行はどれ?

G-19：実習②の運用（疲れさせない）

【目的】「二乗=外れ値に弱い」を体験で理解させ、現実データの扱いへつなぐ。

【口頭補足】外れ値 1 点の e^2 が大きすぎて、他の点を押しのけて SSE を支配することがある。

【実習仕様】(1)outlier で実習①と同じ列作成→(2) 残差² が最大の行を特定→(3) メモ列で理由づけ。

【運用】時間が厳しければ「SSE 最大の行を探す」だけでも OK (全列を作らせなくてもよい)。

20.まとめ：回帰直線は「SSE 最小」で決まる／今後は“読み取りと応用”へ

今日のゴールは、回帰直線の裏側にあるルールを、式ではなく“列（手順）”で理解することでした。

- ・ 残差： $e = y - \hat{y}$ （実測と予測のズレ）
- ・ SSE： $\sum e^2$ （ズレの二乗の合計）
- ・ 回帰直線：SSE が最小になる直線（最小二乗法）
- ・ 二乗の性質：大きいズレを強く重視 → 外れ値に引っ張られやすい

今後への橋

今後は、回帰の結果を読む・使う練習を増やします。

（例）予測値の解釈／残差からの気づき／外れ値の扱い（データの意味づけ）



同じ姿勢：データ → 要約（線）→ ズレ（残差）→ 解釈（理由）

H-20：締めと今後接続（運用）

【目的】今日のキーワードを“3点セット”で固定し、次回の「読み取り・応用」に自然につなぐ。

【口頭補足】回帰は「線を引いて終わり」ではなく、残差と外れ値から“何が起きたか”を考える道具。

【実習仕様】提出なし。最後に全員で「外れ値はなぜ危ない？」を一言で言わせて終了。

【運用】次回の冒頭で、clean/outlier の違いを1枚で再確認すると接続が良い。